

機関番号：37301
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008年度～2010年度
 課題番号：20520344
 研究課題名（和文） 崑曲音律及び草創期太倉地区崑曲家研究
 研究課題名（英文） Research of music scale of Konkiok and its history in Taisau
 研究代表者 小川 保博 (Ogawa Yasuhiro)
 長崎総合科学大学・工学部・准教授
 研究者番号：40169199

研究成果の概要（和文）：200字程度

- (1)文献による音階研究。唐の音楽論「楽府雑録」のドイツ注釈書を和訳した。長崎明楽譜の音律と崑曲との関聯を考察するため、草書文献に釈字訓読を附した。
- (2)音律計測。笛の吹鳴機を製作し、各地の勻孔笛の遺物を計測した。機器吹奏と人の吹奏との差異を確認するため、平均律フルートを機器吹奏して比較した。唐楽と元曲崑曲を貫く共通の活音階(曖昧音階)を見出すことができた。
- (3)崑曲譜による元曲復元。中華人民共和国蔵の写本歌譜を蒐集した。その中から元曲を留存する曲牌共通メロディーの抽出復元を進めた。
- (4)太倉地区の崑曲家研究。梁辰魚「浣沙記」などで知られる〔浪淘沙〕が、明朝初葉からの道教曲の流れを承けていることを明らかにした。太倉の張野塘に対する隣県嘉定の范善臻の新北曲の流行及びその字音を記録した文献を考証した。

研究成果の概要（英文）：

- (1)Research about music scale with historical documents.
- (2)Research about tuning of pipes and flutes.
- (3)Research about Gen kiok(Nioe chio) melody.
- (4)Research about Taisau(Tatsang) Kon kiok(Kun chio) Opera History.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
20年度	1,100	330	1,430
21年度	1,100	330	1,430
22年度	1,200	360	1,560
年度			
年度			
総計	3,400	1,020	4,420

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：各国文学・文学論

キーワード：ドイツ 元曲 楽府雑録 音律 中国音楽 中国演劇 音響学

1. 研究開始当初の背景

ユネスコ世界無形遺産・崑曲の研究は数年前までほとんど文学面にだけに偏っていた。しかし崑曲は活きた歌劇のための詩歌であり、詩歌の精髓はその音楽性に在るので、崑曲文学の研究には音楽が鍵となる。

伝統的にも詩話(=韻文理論)に連なる「曲律」の核心は音楽論である。従って崑曲の曲律の中でも最も本質的なメロディー及び音階を中心課題として研究する必要がある。その中で崑曲音楽を創った明朝江南の太倉地区の崑曲家たちの足跡も重要で

ある。

2. 研究の目的

(1) 文献による音階研究

崑曲のメロディーを探究する過程で、先ず確定すべきが音階である。漢文文献上の音律研究は究めて精密なもので、明の朱載堉は十二平均律確定にまで至った。しかし実際使用の音階はこれと大きく異なる。近代の開山となった林謙三「隋唐燕楽調研究」(昭 11 商務印書館)・岸邊成雄「唐代俗楽二十八調の成立年代」(昭 14 東洋学報 26(3)-27(1))では、歴代の音階について結論未確定だったが、別の大家楊蔭瀏は「中国音楽史上新旧音階的相互影響」(昭 20 中原月刊 2(2))で「雅楽ファ#」と「俗楽ファ」との分立として音階を通史的に解釈し、以来大多数の論者はその説に従っている。しかし最近、本研究分担者石井の論文「工尺譜究竟は何種音階～従唐代二十八調到南北曲」「崑劇北曲～メロディー・音階のおほもとを尋ねて」「音律札記八則」「詞曲定調」により楊説は破れ、ファとシとを曖昧にする実用的な活音階が唐代から崑曲まで続いて来たこと大筋で分かった。これは特殊な推論ではない。イランを中心とする西アジア音楽の半律(四分音)は世界的に見て特殊な高精度の音律であり、その他のアジア各地の俗楽では実用的で曖昧な音階が主流である。

この問題を語る上での核心文献は唐・段安節「楽府雜録」である。楽府雜録所載の二十八調の謎を全面的に解き明かしたのが上記石井論文群だが、謎の一つ「宮逐羽」の句義だけは、四十年前にドイツのギム氏により「各調の羽の下二列から宮が追い上げている」として既に明らかにされていた。Martin Gimm の解釈は、その詳細なる楽府雜録注釈書「Das Yueh-fu Tsa-lu des Tuan An-chieh : Studien zur Geschichte von Musik, Schauspiel und Tanz in der T'ang-Dynastie」(Otto Harrassowitzsh 出版、1966 年)に載っている。この書は東アジアの古典学界でほとんど注意を引くことなく現在に至っており、内容を十分に吟味し評価する必要がある。

(2) 音律計測

音階とは本来先に定まるべきもので、それを表現する道具が楽器だが、楽器には形制の制約が有り、楽器が反対に音階を決めてしまうのが歴史の一側面である。ルネッサンス古楽も例外ではない。唐土の音階は実用面では主要管楽器の笛・箏・尺八によって決まり、勻孔音階・勻字音階と名づくべき二大音階体系が存在したと我々は考える。両体系はともに曖昧シ・ファ音の巧妙な運用を特徴とする。

管楽器で指孔が均等に列する場合、比率の原理により吹孔から遠い孔ほど音程が狭くなるが、唐土の伝統的勻孔笛はこの原理を利

用して上三指を長四度(ド→ファ#)、下三指を短四度(低ソ→ド)に取って曖昧な勻孔音階を形成している。このことを実物に確かめるため、勻孔笛の遺物を機械吹鳴して計測する。

(3) 崑曲譜による元曲復元

元曲文学の創作方法は歌唱を基礎とするもので、メロディー復元こそ元曲研究の鍵である。その前提として楽譜の音階を確定させる研究は上述の通りであり、同時に平行してメロディーを研究して始めて元曲(北曲)を正しく歌唱することができる。このために崑曲中の北曲譜を蒐集する。

(4) 草創期太倉地区の崑曲家研究

崑曲文学は、元人北曲及び琵琶記・揮月亭など南方古劇を含むものだが、崑曲としての現在の歌い方を確立させたのは明朝嘉靖(1522-1566)年間から万暦(1573-1620)初年までの太倉の魏良輔・張野塘ら歌唱家である。同時に隣県崑山の梁辰魚の新作崑曲「浣紗記」が預って力有ったとされている。張野塘の一派は北曲のメロディーを守り続けたが、万暦末から隣県嘉定の范善臻の新北曲が蘇州で大流行した。これら太倉近辺の崑曲草創史を明らかにすることにより、北曲メロディーの留存を側面から補強的に証する必要がある。

3. 研究の方法

音楽史上の文献を読解し、音律を計測し、古楽譜を比較し、太倉近辺の崑曲家を考証する。

4. 研究成果

(1) 文献による音階研究

唐朝の音楽論「楽府雜録」の注釈書「Das Yueh-fu Tsa-lu des Tuan An-chieh Studien zur Geschichte von Musik, Schauspiel und Tanz in der T'ang-Dynastie」(von Martin Gimm 著)の内容を検討した。その中から二十八調の条の和訳を行い、注釈の注釈を作成し、第一回・第二回を紀要(下掲)に連載した。ドイツの原注釈者とも連絡を取って情報を得ることができた。本研究期間終了後もこの連載を数回にわたり継続する予定である。また副産物として、現代ドイツ関連の論考数篇を発表した(下掲)。

また長崎明楽譜の音律と崑曲との関聯を考察するため、著名な魏氏楽譜の序跋の草書に釈字を施し、訓読注釈を附して発表した(下掲)。この序跋の草書はこれまであまり引用されず、偶に引用されても誤訳が多かったが、今後東アジア音楽史の研究上で便宜を提供することができたと思われる。

魏氏楽譜の研究の副産物として、長崎唐人に関連する重要史料「南蛮醜類榜」を発見し

た。長崎に入港した唐船には役人と唐通事が乗り込み、船上でキリスト教禁止を宣布する制札「南蛮醜類榜」を朗々と読み上げることを務めとしていたが、朗詠の声はまるで崑曲のようだと形容されたことが唐通事史料に見える。その制札の原物が大浦天主堂に蔵せられることを発見し、論考若干篇を発表した(下掲)。また演劇は祭祀を起源とするが、尖閣列島近海で鉦鼓を打ち鳴らした琉球祭祀が漢文史料に記録されている。これを論じて月刊論壇誌に発表した(下掲)のも本研究の副産物である。

(2) 音律計測

笛の吹鳴機を様々に試行錯誤しつつ製作し、各地の勻孔笛の遺物を機械で吹鳴し計測した。吹鳴計測した笛は主に次の通り。中華人民共和国崑山市の故呉秀松氏旧用笛一管。東京藝術大学小泉文夫記念室所蔵笛数管。浙江省海寧・蘇州の個人蔵及び博物館蔵の旧崑曲笛計六管。次いでこれらによって得た周波数値をコンピューターで整理した。最も確かな周波数値を得るためには、FFT 解析ソフトなどの技術では逆に複雑化して不精密のため、コンピューター上の音波の山を原始的に目視で数えるという方法を取り、膨大な量の作業となった。また機器吹奏と人の吹奏との差異を確認するため、平均律フルートを機器吹奏して平均律と比較した。以上の結果、唐楽と元曲・崑曲とを貫く共通の活音階(曖昧音階)を見出すことができた。唐楽の曖昧な部分を更に崩したのが元曲・崑曲であると考えられる。成果は外部に投稿すべく準備中である。

(3) 崑曲譜による元曲復元

中華人民共和国蔵の写本歌譜を蒐集した。その中から元曲を留存する曲牌共通メロディーの抽出復元を進めた。成果は投稿準備中である。

(4) 太倉地区の崑曲家研究

明朝太倉の魏良輔の新崑曲による梁辰魚の新作劇「浣沙記」は、特殊な〔浪淘沙〕曲牌を含む。メロディーの固定しない南曲の中に在って、浪淘沙だけは北曲メロディーで固定しており、清朝までの劇作を通じて用いられる。この特殊なメロディーのもとは梁辰魚「浣沙記」であろうとの予測の下に考察を進めた。その結果、浣沙記よりも以前から古い道教的説唱曲の流れの中に浪淘沙が在り、崑曲中でも僧侶・道士らの役柄が歌うことが確認できた。最も早くは明初の永楽大典中の古戯文の浪淘沙から既に説唱曲の流れの中にあり、メロディーもそれ以前に始まる可能性がある。従って太倉との関連性は浅いという結論である。成果は澳門の学会で口頭発表し

(下掲)、その完成稿の一部を紀要に発表した(下掲)。残る部分は現在刊行のため校正中である。

浪淘沙のリズムには民間譜十八拍と文人譜十九拍の二種があり、十八拍は北曲メロディー、十九拍は南曲メロディーと分かれている。太倉の隣県崑山の故高慰伯氏は、必ず十八拍であると近年まで伝承していたため、口述をお願いして記録した。それについて崑山の新聞に報告文を発表した(下掲)。

太倉の張野塘の一派は北曲のメロディーを守り続けたが、のちには隣県嘉定の范善臻の新北曲が蘇州で大流行した。范善臻の著した「中州全韻」は崑曲の根本韻書となっている。中州全韻の序文(燃藜居士撰)には范善臻の足跡及び芸術的傾向が記載されているが、これまでの研究では行書体の誤積があり、足跡の年代も正しく解釈されていなかった。今回これに訓読注釈を附して発表した(下掲)。太倉から江南全域に広がった崑曲史の流れの重要部分に再考を迫るものとなる。

また范善臻がまとめた崑曲の字音体系に於いては「陰陽」「清濁」という概念が基本となっている。これを遡って考察する中で、漢字音学はそもそも南北朝時代に曼荼羅の回転する形として印度からもたらされたことが分かった。そして恐らく南朝齊梁の間の蘇州地区に於いて、曼荼羅にもとづいて「清濁」の概念が創始されたと推測し、長崎の研究会で口頭発表した後、香港誌に発表した(下掲)。これにより范善臻の「陰陽」概念を客観的に把握することができるようになった。副産物の一つである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計17件)

小川保博『『ペルジネッテ』-フリートリッヒ・イマヌエル・ビーアリンクによる最初のドイツ語訳(1765)』、2008年、「長崎総合科学大学紀要」48(1)、pp.107-112、査読無。

小川保博『『ペルジネッテ』-フリートリッヒ・シュルツによる第二のドイツ語訳および改訂版(1790)』、2008年、「長崎総合科学大学紀要」48(1)、pp.113-118、査読無。

石海青(石井望の筆名)「倭漢音圖旋法解」、2008年、香港中文大學「中國語文研究」25、pp.87-99、査読有。

いしゐのぞむ「左翼的正かなづかひの説」、2008年、正かなづかひの會「かなづかひ」3、pp.15-16、査読無。

いしゐのぞむ「活用語尾「ゐ」「ゑ」限定的復舊の提案」、2009年、正かなづかひの會「か

なづかひ」6、pp.8-10、査読無。

小川保博(訳)「アレイダ・アスマン『ドイツ人のトラウマ?—想起と忘却の間の集団責任テーゼ』」、2009年、「長崎総合科学大学紀要」49(2)、pp.167-178、査読無。

小川保博(書評)「ジーモン・ヴィーゼンタール著『ひまわり-ユダヤ人にホロコーストが赦せるか-』」、2009年、長崎新聞社「長崎新聞」7月5日朝刊、6面、査読無。

いしみのぞむ「體文倭音輪相校釋」、2009年、無窮会「東洋文化」復刊103、pp.36-56、査読無。

石海青(石井望の筆名)「崑曲名師高慰伯先生與浪淘沙」、2010年、崑山日報社「崑山日報」1月1日号B4面、インターネット版1月4日号、査読無。

いしみのぞむ「文科科學省認可漢字検定の訓讀み問題を批判する」、2010年、正かなづかひの會「かなづかひ」8、pp.6-11、査読無。

小川保博・いしみのぞむ共訳「樂府雜録・二十八調圖・マーティン・ギム注・第一回」、2010年、「長崎総合科学大学紀要」50、pp.1-4、査読無。

いしみのぞむ「唐船入港用「南蠻醜類榜」原本紹介」2010年、「長崎純心比較文化學會會報」4、pp.4-9、査読無。

いしみのぞむ「釋字七首 附和訓(魏氏樂譜序・魏氏樂器圖跋・錢擇評日本外史序・中州全韻卷前小引)」、2010年、長崎純心大学「純心人文研究」16、pp.1-24、査読無。

小川保博「ホロコースト第二世代の『語り』」、2010年、地中海社「地中海」2010-11、pp.14-15、査読無。

いしみのぞむ「唐學四論 大浦天主堂藏榜辨釋・中州全韻以下陽上無きの辨・浪淘沙入劇考・落梅風求腔」、2011年、長崎純心大学「純心人文研究」17、pp.7-29、査読無。

小川保博・いしみのぞむ共訳「樂府雜録・二十八調圖・マーティン・ギム注・第二回」、2011年、長崎純心大学「純心人文研究」17、pp.1-6、査読無。

いしみのぞむ「尖閣領有権、漢文史料が語る真実」、2011年、産経新聞社「正論」468、pp.190-200、査読無。

[学会発表] (計3件)

いしみのぞむ「拼音字母趣味排列法」、長崎中国語教育研究交流会総会、2008年12月6日、長崎大学。

いしみのぞむ「大浦天主堂藏唐文禁教榜辨釋」、第3回長崎純心比較文化学会、2009年5月16日、長崎純心大学。

<http://hdl.handle.net/2433/78314>

石海青(石井望の筆名)「詩餘浪淘沙入劇考」、第2屆中華詞學國際學術研討會、2009年12月9日、澳門大學。

[その他]

ホームページ等

<http://www.ne.jp/asahi/tityukai/tanka/TOKUSHU/ika-ogawa1011.html>

<http://hdl.handle.net/2433/78314>

http://www.ksrb.cn/news.aspx?id=40854_63

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小川 保博 (Ogawa Yasuhiro)

長崎総合科学大学・工学部・准教授
研究者番号：40169199

(2) 研究分担者

中村 光彦 (Nakamura Mitsuhiko)

長崎総合科学大学・工学部・准教授
研究者番号：70086411

石井 望 (Ishiwi Nozomu)

長崎純心大学・人文学部・准教授
研究者番号：50341558

(3) 連携研究者

無 ()

研究者番号：